

サイエンスコミュニケーションと図書館，そして大震災

長神 風二*，池城 かおり*

科学研究を，その進展の過程から社会と共有することを目指すサイエンスコミュニケーションと，知の蓄積と流通を担う図書館の活動との間には，共通点も多い。本稿では，まず，図書館やサイエンスコミュニケーションについて考えてきた筆者が，2011年3月11日の東日本大震災を直接的に経験することで得た知見を体験談として記す。非常時に，生命と直結する情報をどう扱っていくかは，双方の専門家にとって重い課題である。図書館とサイエンスコミュニケーションの相互の専門性を協創的に用いることで，学術的な研究成果の発表システムの刷新など，新規の学術の可能性を拓く可能性があることを示唆する。

キーワード：サイエンスコミュニケーション，図書館，大震災，双方向性，学術情報

1. はじめに

3月も下旬になろうというのに外は真冬のように寒い。エアコンで適度に暖かく，電気は点灯して明るい中で，パソコンに向かって原稿を書いていた。ガスは出ないから風呂には入れないが，洗濯の水には不自由しなくなった。職場の同僚たちの間では，ガスが出ないのはほぼ共通だが，まだ水が出ないところもあるし，住居にしていた建物が危険と判断されて困っている人もいる。急遽引越しの話も珍しくない。車通勤の人はガソリンの入手が難しいし，一部の建物のエレベーターは深刻な故障で，10Fのオフィスまで階段の人もいる。3月11日の地震で，あらゆるものの様相が変わってしまった東北の地で，図書館，学術情報，サイエンスコミュニケーションの相互の関係とその意味を，大震災を背景にして描いてみたい。この原稿の執筆は主に3月下旬に行われ，提出は，地震後4週間後程度である。多少の混乱や，文献の参照の不足などは，ご容赦願いたい。また，必ずしも特集の趣旨に合わないものも内容に含まれることをお許し願いたい。

筆者のうち長神は，サイエンスコミュニケーションが行われる場作りを担うサイエンスコミュニケーターとして，図書館との関係を考えてきた。2008年に発表した拙稿「サイエンスコミュニケーションと図書館」¹⁾で，サイエンスコミュニケーションにおける図書館の可能性について論考し，いくつかの提案を行った（4節参照）。本稿の執筆企画時点では，これら提案以降，どのような動きがあったかをまとめると共に，前著では取り上げなかった，学術システム全体との関わりや，評価との関係に踏み込んで論考をまとめるつもりだった。だが，大震災の発生は，喫緊に書くべきことを筆者に提供している。

本来，まず，問題設定のあり方や定義から入らなければ，論考の体をなさないが，本稿では取って目をつぶっていた。地震の現場のレポートから入りたい。次節で，たまたま旅行中に仙台にいて地震に遭遇した，筆者の一人，池城の体験談を取り上げる。第3節は，長神が，仙台にいて，約4週間で科学広報の業務で行ったことなどを中心に体験談を書く。そして，第4節でサイエンスコミュニケーションと図書館の問題の基本的なフレームを示し，当初の企画をかなり圧縮した形で提示し，第5節でまとめる。

なお，本稿は，長神と池城の共著だが，池城の執筆は2節の「サイエンスコミュニケーションと図書館と大震災」の部分に限られる。被災した池城の体験が，本稿に奥行きを与えると考えると，長神が依頼したものであり，本稿全体の文責は全面的に長神が負う。

2. サイエンスコミュニケーションと図書館と大震災

以下の文章は，著者の一人，池城による，2011年3月20日時点での寄稿である。

仙台を旅行中に地震に遭い，避難所で2日間を過ごした。タイトルに相応しい内容は思いつかないが，この間の行動や「情報」について，気づいたこと，考えていたことを書いてみたい。貴重な紙面を文字の羅列にしてしまうことに大変恐縮なのだが，きっとそれぞれの立場の方が必要なことを読み取って下さると思う。

また，所持していた携帯電話は通話機能のみでメールもネットもできない状況だったことを念頭にお読みいただきたい。

地震にあったのは愛子（あやし：仙台中心部から約15km）の仙台市天文台（愛子駅から3km程度）のプラネタリウム番組中のこと。14時30分スタートからわずか16分後に揺れが始まり，照明が点いて避難誘導に従い館外へ。すぐに閉館が決まり，バスで仙台駅を目指す。道路の状況が不明なため運転手が途中の乗車希望を断る声が聞こえて

*ながみ ふうじ，いけしろ かおり 東北大学脳科学グローバルCOE，宮古島市立平良図書館ボランティア
〒980-8575 宮城県仙台市青葉区星陵町2-1
Tel. 022-717-7908 (原稿受領 2011.4.13)

くる。今乗っている自分も全然知らない場所で降ろされるか、バスごと立ち往生を覚悟する。幸い市内のアーケード街近くまで乗せてもらい、徒歩でホテルに着く。ホテルでは電気・水道が止まっていたがご厚意により一泊させていただき、翌日 12 日午前中に避難所の宮城県庁へ他の宿泊客とともに移動する。

宮城県庁ではライフラインは確保され、ロビーには大型 TV やホワイトボードが設置され様々な情報が更新される。館内アナウンスは随時行われ、待ち合いや探し人、公衆電話からの連絡希望などに対応していた。緊急地震速報も同じスピーカーから流れるので皆で余震に備えることができた。食事の配給も基本 3 食あり、毛布も床敷の段ボールもレンタルされる。後に聞くと、すぐ近くの避難所ではそうはいかなかったらしい。移動前に徒歩で避難所を見歩いて、行き先を「県庁に」と提案したメンバーのおかげだった。14 日朝、私は山形行きのバスに乗り、空路で伊丹を経由し沖縄へ帰った。

「今必要なのは情報です」。震災直後の TV インタビューで訴える声を何度も聞いた。では何の情報が必要なのか。もしあのときの被災者からの問い合わせ内容を分類できたら、ほとんどが安否情報ではないかと推測する。しかし、混乱のために情報の伝達が滞り、緊張のピークが続くことになる。せっかく助かったのに心労で健康や判断力に影響がでることもある。最優先は被災地できちんと生き抜くことだと思うのだが、そのような冷静な対応こそが難しい。安否情報の発信は初期段階では個人々に委ねられており、公衆電話への長蛇の列や携帯電話の画面をずっと見ている人たちの疲労をみて、もしこれが当初から公的に代替できれば被災者も管理する行政にとっても負担が全く変わってくるだろうと思った。今回出勤していたのは県庁職員などの役職の方々かは分からないが、専用の担当を置いてすぐに直接聞き取りを行い、安否情報を随時発信できる体制が今後検討されてもいいのかもしれない。

個人が生き抜くために優先した方がいいと感じたのは、相互扶助のできるあらたなコミュニティを作ることだ。このような状況で立場も異なる知らない人たちと仲間を作るのは勇気のいることだが、私は宿泊客の方々に声をかけていただき、助けていただいたことに非常に感謝している。メンバーの一人は阪神の震災を経験しているといい、率先して情報収集・伝達、物資の分配を他のグループにも気を配っていた。彼の行動が生き抜くための一番大事なことを指し示していた。連帯感や仲間意識によって不要な緊張や混乱を抑えることができる。生き抜くことにつながる。だから、早い段階で周りにある現実に向けられることが大事だと教えられた。

地元では被災地への支援の声がたかまり、活動も行政あげて活発に行われている。しかし、同時に災害に対する備えや体制の再点検が急がれる。この紙面でお伝えしていることを自分の住む地域にも伝えていきたい。

3. 震災とサイエンスコミュニケーション、そして図書館

本節では、長神による、仙台での震災後の活動を大学広報のものを中心に記す。以降、「筆者」はすべて長神を指す。

3.1 地震発生初期のコミュニケーション

3.1.1 地震発生当日と大学図書館

筆者は、地震発生当時、勤務先である東北大学大学院医学系研究科のある星陵キャンパス内において、発生後数十分以内での各研究室の安否確認のための点呼等に関わった。その際、附属図書館医学分館は、医学系研究科の人事上の組織図には入っていないため、緊急時の点呼の対象から外れてしまいかねないところがあった。安否確認を、人事上の組織図に加えて、建物ごとでの二重チェックを始めた時に、筆者が医学分館の、利用者を含めた確認の必要性に気付く、分館長が現場に向かった。実際には、分館の現場では、利用者・職員ともに全員無事であることが直ちに確認されようだが、研究科緊急対策本部との連絡は、発生から 15 分間には行われなかった。大学附属図書館の分館長は多くの場合に、研究科の要職を兼ねると共に、研究分野の長も兼ねており、非常時に図書館長としての立場を忘れがちだ。また、分館の多くは、図書館の本部とはキャンパスが離れており、キャンパス間の連絡手段は、通信の途絶によりほぼ不可能に近い。学内的に、半端な組織になりやすい大学図書館は、直近の学内組織と複数の連絡ルートを持つておくことも肝要であろうと思わされた。

3.1.2 発生から数日と大学広報の役割

筆者は、所属は東北大学脳科学グローバル COE だが、東北大学大学院医学系研究科の広報室担当を兼ねている。地震発生翌日以降、あらゆるライフラインは停止したままで、サーバーもダウンしていたが、わずかにツイッターの公式アカウントは運用可能で、地震発生二日後の 13 日の昼には発信を開始した²⁾。それに先立つ、地震発生当日の夕方に、長神の個人アカウントからは、星陵キャンパス内にいた構成員の安全は確認されたことをすでに発信している。

15 日頃までに大学広報として行えたことの大部分は、構成員の安否確認にかかる部分である。この作業は、本来的には大学では教務などが担当すべき事柄だが、通信手段が極めて限定される中で、ツイッター等に習熟している広報室メンバーが直接担当の方が効率的であったことと、そもそも出勤可能な職員数が限られ、平時の業務分担制が必ずしも意味をなさなかったため広報室が担当した。

当初、大学のサーバーが稼働しておらず、筆者個人の gmail アドレスを連絡先に用いざるを得なかった。サーバーが各地に分散した複数のアドレスを持っていることは極めて重要だ。安否確認を詐称した個人情報収集も、震災後 1 日ですでに出現しており、それらと区別することも必要だ。筆者は gmail アドレスを用いざるを得なかったが、大学の正規ドメインのアドレスを、広域的にサーバー分散

させて所持しておく、といった対策も必要なことも知れない。

研究科のサーバーが復旧した 14 日以降は、ウェブサイト更新を通じて情報発信に努めた。それらを次項で扱う。

3.2 発生後数日経過後以降のコミュニケーション

地震発生後 4 日目の 15 日には、大学本部によって、被災建築物応急危険度判定が行われている。図書館医学分館は、注意しての利用が認められる黄色判定である。その頃には、医学分館は復旧した電気を利用し、1 階部分のみの限定開館に踏み切っている。通電が遅れた地域に住む学生・院生も多いなかで、いち早く、電気・インターネット・プリンターが使える環境を開放したことは高く評価されるべきことだろう。

広報室は、この医学分館の取り組みを含め、研究科に關係する動向を次々にツイッターを通じて発信している。また、14 日以降 18 日までで合計 4-5 回のトップバナー変更、5 ページ程度の新規ページ制作、数十回のトピックス更新をウェブサイトで行っている。主な内容は、14-15 日は安否確認の進捗情報、研究科長からのメッセージ³⁾、所属する大学生・大学院生向けのスケジュール面などの連絡の発信が主体であり、16 日以降は大学病院含め各地から被災地に向かう医療団の後方支援を含め、地域医療に関する情報提供などを行った⁴⁾。避難所における感染症蔓延防止へ向けた注意喚起、精神疾患の患者ケアに向けた情報提供、長期化する避難所生活での健康留意方法などが主な内容である。医療の専門家のみならず、地域住民に対する健康のための情報としても機能した。

平時であれば、研究科のウェブサイトは、学外に向けた情報発信に機能は限られる。だが今回の震災時には、学内サーバーへのアクセスの方がより難しい状況にある構成員が多いことや、安否情報確認などが、大学内部にとどまらない関心を集めていることなど、平常とは違う対応が迫られた。大学とその構成員、また外部の利用者の通電環境・ネット環境そのものがめまぐるしく変化していく中で、可能な限り状況に即応し、より効果が高い方法をとろうとした。

3.3 図書館、サイエンスコミュニケーションをめぐる諸活動

前節までは、筆者が関与した大学の公式な活動を中心に書いたが、大学以外で行った活動を、図書館とサイエンスコミュニケーションを中心に、いくつか取り上げてみる。

3.3.1 大学図書館の動きのまとめ

地震発生から 3 日程度経ってからは、大学内でも研究活動等を復旧できない環境にあるところもあり（東北大学では、工学系などが特に該当する）、被災地域から帰省するなどの動きが広がった。そこで、遠隔地の大学において、東北大学等、被災地の大学の学生が大学図書館を利用できるようにする措置が、散発的に始まった。筆者は、友人の岡本真氏（Academic Resource Guide）に依頼し、すでに彼

が始めていた被災地図書館支援の動きをまとめるサイトに、被災大学生に図書館を開放しているものの一覧を作成して掲載⁵⁾するよう依頼した。その他、文献のアクセスの開放など、さまざまな動きがあり、詳細な報告が待たれる。

3.3.2 遠隔避難者の情報支援活動

2 節を執筆した池城から、宮古島に東北からの避難者がいることを聞き、被災地の新聞 2 紙（河北新報、福島民報）をまとめて購入して送った。宮古島市の平良図書館に設置され、閲覧されることになると共に、筆者が送ったものの後、一定期間は市が購入することになった^{6),7)}。

この試みは、1)激甚な被災地から遠隔地に避難した人々に生活に密着した情報支援を行う、という意味のほかに、2)遠隔地においても現地の感覚に近い情報を得ることができる、3)大量に購読者を失った被災地のメディアを支援することができる、といった意味も持ち得る。反響は大きく、現地の新聞のみならずテレビも取り上げた⁸⁾ほか、沖縄本島のメディアでも取り上げられた⁹⁾。

3.3.3 原子力発電所事故の状況をめぐるサイエンスコミュニケーション活動

大学での業務での震災復興活動・取材対応などがある程度一段落した 4 月上旬に、急遽、放射線と放射能をめぐる啓発的なポスターを制作した¹⁰⁾。原子力発電所事故の報道が目まぐるしい事態の進展に日々高度化し、特に避難所などで他の情報ソースを持たない人々にはついていけなくなっていると感じ、また、そうした要請の声もきいたので（例えば、熊本の医師のブログ¹¹⁾）急遽制作した。転載・改変自由としたこともあり、どこまで使われたかわからないが、ツイッターでの拡散状況やアクセス状況を見る限り、数百にとどまらない反響を得た。

3.4 震災と図書館、サイエンスコミュニケーション

本節では、前項まで、筆者個人が関わったことを中心に述べた。全国的には、現時点では筆者の把握できていない多数の活動があるだろうし、それらについてまとめるのは、別の機会に譲る。大震災の中で、図書館についても、サイエンスコミュニケーションについても、また両者の連携についても、事態の進行の中で、専門性を活かして貢献できるシーンは、非常に多くある、ということは筆者の率直な実感である。

次節以降は、もともとの執筆依頼を受けて用意していた原稿の圧縮版に移る。

4. サイエンスコミュニケーションと図書館

4.1 サイエンスコミュニケーション

サイエンスコミュニケーションとは何か、という定義はすでに多くあるが、「研究者、メディア、一般市民、科学技術理解増進活動担当者、行政当局間等の情報交換と意思の円滑な疎通を図り、共に科学リテラシーを高めていくための活動全般」¹²⁾、「科学というものの文化や知識が、より大きいコミュニティの文化の中に吸収されていく過程」¹³⁾といったものが知られる。学術論文を中心とした学術情報流

通全般を指す **scientific communication** が現在は学術コミュニケーションという訳語を当てられて¹⁴⁾、主に、システムの側面を指すことが多いのに対して、サイエンスコミュニケーションは専門的な科学の情報が、非専門家の集団、特に一般社会と共有されるコミュニケーションの場そのものと、その際の活動を指すことが多い。サイエンスコミュニケーションでは、学術の場で生まれた専門知を非専門家に「伝える」面だけでなく、非専門家が持つ専門知へのニーズや非専門家側の知の体系を、専門家の側に伝え、相互の理解を促進する、双方向的な側面の重要性が強調されている。科学技術の成果を還元する、普及・啓蒙する、といった姿勢から、プロセスを共有する、対話する、といった姿勢への転換が重視される。

また、サイエンスコミュニケーションについて語る際の非専門家とは、必ずしもいわゆる一般市民を指すとは限らず、その分野の専門家以外の集団を指す。時に、科学技術政策担当者、といった別の専門家であることもある。

4.2 サイエンスコミュニケーションにおける図書館の役割

サイエンスコミュニケーションにおいて、図書館が担っている、また、担いえる役割について、本項で述べる。4.2.1では、サイエンスコミュニケーション活動の実践の“場”として役割を前論考¹⁾を引き継いでまとめ、4.2.2では、図書館に集積する学術情報をサイエンスコミュニケーションに活かすことを、まだ実現していない可能性を中心に記す。4.2.3では、図書館員の多くが持つ能力が研究機関と研究者が行うサイエンスコミュニケーション活動に寄与できる可能性を示唆し、4.2.4では次世代の研究成果発表方法を、図書館情報学の専門家と研究者との協力で模索することの可能性について述べる。

4.2.1 サイエンスコミュニケーションの実践の場としての図書館

サイエンスコミュニケーションの現場にいと、図書館はある種、憧憬の対象で、利用者の層の広さと厚さは、科学館とは比較にならない。それだけに、サイエンスコミュニケーションを行うための、“窓口”に類する場としての役割は、大きく期待される。

2008年の論考では、①サイエンスカフェなど具体的な活動の会場として図書館を活用すること、②研究機関附設の図書室・情報室を外部開放すること、③図書館の特設コーナーで積極的に科学技術を取り上げること、④前述の③を行う際に各種研究機関との連携をはかること、⑤人々の科学技術へのニーズをくみ上げる場として図書館を活用すること、の5点を実践にあたっての具体的な提案とした¹⁾。いずれもサイエンスコミュニケーションの実践の場として図書館を利用することの具体例だ。すでに行われていたことも、サイエンスコミュニケーションの文脈でとらえ直すことによって、理系の専門的な学術情報に必ずしも強くない図書館員が、専門性の高いサイエンスコミュニケーターや研究者に協力を得やすくなることも多いだろう。“場とし

ての図書館”をサイエンスコミュニケーションの観点で活用する有用性は、前論考以降もある程度広がりを見せている。例えば、福井県立図書館は2009年10月に「キッズサイエンスカフェ」と称した、事実上、実験教室に類することの実施をしている¹⁵⁾。また仙台市民図書館は、入居するせんだいメディアテークの1Fで行われる科学系のイベントに合わせて、特集展示を行うといった試みも行っている¹⁶⁾。

4.2.2 図書館に集まる情報をサイエンスコミュニケーションに活用する

図書館は、その性質上、多くの学術情報が集積される。それをサイエンスコミュニケーションに活かす、という方策が考えられる。

専門的な学術領域、特に理系の領域で、新たな知見が発表されるのは、英文の学術誌上である。学術機関に所属していない市民がアクセスすることは、二重の意味で非常に難しい。一つには、記述が専門家に向けたもので内容的な難易度が高く、しかも英語で書かれていることで、もう一つは、学術機関に所属していなければ、そもそも学術誌・論文にアクセスできる場所・機会に限られることである。

それに対して、多くの大学図書館で運用が開始され整備と論文搭載が進んでいる機関リポジトリは、基本的にオープンアクセスであり、市民の利用を妨げない。わが国においては大半が税金で支えられている研究成果を、市民に対して直接的に還元する手段となり、それはサイエンスコミュニケーションの一つの形になり得る。

論文が公開可能である、というその一点のみを問題にすると、前述したサイエンスコミュニケーションの特色である、双方向性とは縁遠いものに思われるかも知れない。しかし、これまで最先端の研究成果が、研究機関からの通知(多くはプレスリリースによる)を受けて掲載されたマスメディア上の記事によることを主たる方法として伝えられてきたことと比較すると、大きな違いがある。機関リポジトリ等(論文そのものがオープンアクセスにあるものも増えているので、図書館の問題とは離れるがこれも含む)を通じて、一次的なソースを参照可能になることは、4.1項で触れたのとは違う形だが一種の双方向性と言えるだろう。

そして、機関リポジトリ等のソースを参照しながら、サイエンスコミュニケーターや研究者が、研究成果等の解説を行うことができる。ソースを明示でき、直接的に査読付きの論文にリンクできる、ということで、それぞれの言説の検証がより容易になることは、ある種の“言いっぱなし”がまかりとおってきた現状からは大きな進歩になり得る。

課題は研究者の間に、機関リポジトリとその効用への理解はおろか、認知も進まず¹⁷⁾、また認知を進めようとする大学図書館関係者の動きも鈍いことだ。努力次第では、大学図書館は所属研究者の研究履歴を包括して取得して論文情報とリンクすることも可能だろう。すでにResearchmap¹⁸⁾が行っていることと近いが、さらに教育関係のコンテンツを収集することで、より大きな価値が生まれるだろう。

4.2.3 図書館の人的リソースとサイエンスコミュニケーション

大学図書館にある人材とその専門知識が、研究者の行うサイエンスコミュニケーション活動に活かされ得ることは、全く知られていないと言ってもよいだろう。この項では、評価指標と、調査法についての知識を例にする。

インパクトファクターなどの学術誌を評価する指標については、通常、図書館員は理系の研究者よりも精通している。研究成果を客観的な指標でまとめるのに各種の指標を用いることはある程度有効だが、多くの研究者は詳細を知らない上に、時にその性質を誤解している¹⁹⁾。一方、各研究機関で時限プロジェクトが増え、自己評価を求められるシーンは増えている。研究者人事においても、数値化可能な指標を重視しようとする動きもある。指標に詳しくない研究者が成果の掲載された学術誌のインパクトファクターを足し合わせてみる、といった意味があるとは言い難いことも行われている現状もある。これに対して、専門性が高い図書館関係者が参画すれば、プロジェクトの当初の目的に沿った形で新たに指標を設定して用いるようなことが行い得るだろう。研究者集団と、科学技術政策担当者や科学系メディアなど、別の専門性の高い集団との間のサイエンスコミュニケーションにおいて活かされそうな例である。

また、文献調査法は図書館員が強いスキルの一つだ。また、利用者の調査ツールの活用限界についてもよく知っている。研究者は一般向けのサイエンスコミュニケーションで、配布資料をつくることがあるが、その際に出典を明示する仕方は、大抵、自らの論文と同じである。図書館員の協力を得られれば、利用者に活用可能な出典明示方法に、いわば翻訳することも可能になるだろう。

4.2.4 次世代の研究成果発表方法？

ガーベ²⁰⁾が、あるいは DNA 二重らせん構造の発見者の一人クリックの方が先とも言われている²¹⁾が、科学の本質はコミュニケーションだ、とされる。サイエンスを担う研究者の誰もが行う、研究の本質に近いところでのコミュニケーションを、同業の研究コミュニティの中で閉じたもの(藤垣が指摘するような「ジャーナル共同体」²²⁾に象徴される)から、いかに開いたものに変えられるだろうか。研究成果がまとまった段階になってから、他のコミュニティとのコミュニケーションを行うのではなく、その過程そのものを、他のコミュニティからの影響を常に受けることが可能な形で開いていけないか、という発想だ。

現状で、四一五つの主な結果とそれを示す図で構成されることの多い学術論文が、その図一つ一つの段階で公開できたらどうだろう。日々の実験結果を公開できたらどうだろうか。具体的には、個々の研究ノートを電子化し、機関リポジトリなどと接続し、外部からのアクセスも一部可能にする。こうした全く新規の知的なインフラストラクチャを大学図書館とそのネットワークを中心に構築できないだろうか。知的財産権上の問題は生じるだろうが、特許権の制度を、現状の先願主義・先発明主義から、先公知主義のような形に変えていくことで、ある程度解決できると考え

る。

言わば、科学的な新しい知見・言説と、それを導き出すためのデータとを分離する試みだ。科学の営みの過程が、その初期から、人々の目も手も届く範囲に置かれるようになる。やや極端な言い方をすれば、科学研究において、研究のための資源(人、環境、資金など)という研究者によって独占されてきたものを、広く公開するための提案だ。

4.3 図書館とサイエンスコミュニケーションを結びつける理由

図書館およびその周辺の学問分野は、集積された専門知を体系化して扱うことに長け、専門知と一般利用者という非専門家とのインターフェースとしての役割を長年果たしてきた。最近ではラーニングコモンズなど従来の図書館のあり方にとどまらない動きもある。だが、専門知は専門家の手によって生まれる、という前提に立っているように見受けられるし、コミュニケーションによって新しい知が生まれる現場になる、といった意識は希薄に見える。

一方、サイエンスコミュニケーションの世界には、サイエンスのことをいろいろな切り口で語り魅せる手法に長けた人材は多いし、コミュニケーションの場づくりをする、という問題意識もある程度以上、浸透している。しかしながら、サイエンス愛好者以外の関与者を多く得ることに必ずしも成功していないし、非専門家の声を拾い上げるシステムをつくりあげるところにも至っていない。

図書館とサイエンスコミュニケーションは、知を提供し、知を共有し、知を構築する、という共通点がある。そして、相互補完可能な欠点が多く、協力し合い相互交流を進めることでうけるであろう、メリットも大きい。また、筆者には、両者の最終的な目的が共通するものに思えるのだ。資料の収集や体系化は図書館の目的の一つだろうが、最終的にはそれを利用して供することであろう。利用するのは、突き詰めるところ個人だ。図書館は情報提供を通じて個人の知る権利を保障している。一方、サイエンスコミュニケーションは、欠如モデルへの反省から直接的な知識提供を目的には掲げないことも多いが、場づくりを通じて、形成される知への参画を保障しようとしている。いずれも個人が持つ知への権利の保障であると考えられる。

5. おわりに

本稿は、急遽執筆した 2, 3 節と、それまで準備してきた 4 節がつぎはぎに配置されたものに感じられるかも知れない。とは言え、図書館とサイエンスコミュニケーションは共通の目的を持つものだ。災害時、情報は生命に直結する。平時においてはあまり意識されないが、個人が得る情報は、その個人がより良く生きるためのものだ。図書館もサイエンスコミュニケーションも、それぞれの専門家が、お互いの専門性を認識しあって協力することで、新しい可能性が学術に拓かれるものだと考える。

参 考 文 献

- 1) 長神風二. サイエンスコミュニケーションと図書館. 情報管理. 2008, vol.51, no.5, p.321-333.
- 2) Twitter. アカウント@tohoku_univ_med.
http://twitter.com/#!/tohoku_univ_med, 特に 3/13 以降の一連の書き込み.
- 3) 東北大学大学院医学系研究科. 研究科長メッセージ.
<http://www.med.tohoku.ac.jp/emg/comment.html>, [accessed 2011-03-30].
- 4) 東北大学大学院医学系研究科. 医療関係情報など.
<http://www.med.tohoku.ac.jp/emg/public.html>, [accessed 2011-03-30].
- 5) savelibrary@ウィキ-東日本大地震による図書館の被災情報・救援情報,
<http://www45.atwiki.jp/savelibrary/pages/52.html>, [accessed 2011-03-30].
- 6) 宮古毎日新聞. 4月8日付け紙面.
- 7) 宮古新報. 4月8日付け紙面.
- 8) みやこくテレビ. 放送日: 2011/04/07,
<http://media.miyako-ma.jp/mtv/content/view/5939/57/>, [accessed 2011-04-08].
- 9) 沖縄タイムスおよび琉球新報. 4月9日付け紙面.
- 10) nagami@ウィキ.
<http://www19.atwiki.jp/nagami/pages/14.html>, [accessed 2011-04-08].
- 11) 桑和彦のメモログ.
<http://sleep.cocolog-nifty.com/blog/2011/04/post-3d71.html>, [accessed 2011-04-08].
- 12) 渡辺政隆, 今井寛. 「科学技術理解増進と科学コミュニケーションの活性化について」, 文部科学省科学技術政策研究所, 2003.
- 13) S.ストックルマイヤーほか著・編, 佐々木勝浩訳. サイエンス・コミュニケーション—科学を伝える人の理論と実践. 丸善プラネット, 2003.
- 14) 倉田敬子. 学術情報流通とオープンアクセス. 勁草書房, 2003, p.6.
- 15) 福井県立図書館. これまでの子ども室特集コーナー (平成22年度).
http://www.library.pref.fukui.jp/info/kikaku/event_kodomo_H22.html, [accessed 2011-03-08].
- 16) 長神風二. 脳カフェと図書館展示が連動する. Brain and Mind. 2009, vol.10.
<http://www.brain-mind.jp/newsletter/brain-and-mind-10.pdf>, [accessed 2011-03-01].
- 17) 長神風二. “コミュニケーションから見た科学研究情報流通BMB2008におけるフォーラムから”. 情報管理. 2009, vol.52, no.2, p.77-85.
- 18) 国立情報学研究所. Researchmap. リサーチマップ.
<http://researchmap.jp/> [accessed 2011-03-25].
- 19) Garfield, E., “The Agony and the Ecstasy - The History and the Meaning of the Journal Impact Factor”, presented at the International Congress on Peer Review and Biomedical Publication, Chicago, U.S.A., September 16, 2005
<http://garfield.library.upenn.edu/papers/jifchicago2005.pdf> [accessed 2011-03-25].
- 20) W.D. ガーベイ. コミュニケーション: 科学の本質と図書館員の役割. 津田良成監訳. 東京, 敬文堂, 1981, 302p.
- 21) B.C. ヴィッカリー, 村主朋英訳. 歴史の中の科学コミュニケーション. 東京, 勁草書房. 2002.
- 22) 藤垣裕子. 専門知と公共性—科学技術社会論の構築へ向けて. 東京大学出版会. 2003.

Special feature: Capabilities of collaborations with libraries. Science communication, library and massive earthquake. Fuji NAGAMI, Kaori IKESHIRO (Tohoku University Neuroscience Global COE, 2-1 Seiryomachi, Aoba-ku, Sendai, Miyagi 980-8575 JAPAN)

Abstract: Science communication aims to share academic information with public from the stage of production. Though libraries stock and circulate academic information after its production, science communication and libraries have much in common about their aims and characters. In this article, we share our experience on the massive earthquake on 11th March, 2011, and analyze from the view of science communication. Information at the emergency directly links to the lives. Creative corporation between librarians and science communicators lead to the proposal for the novel system for academic information publication.

Keywords: science communication / library / massive earthquake / dual direction / academic information